

論文

ソーシャルワークの知の構造（二・完）

—中村雄二郎の「臨床の知」概念を手掛かりに—

中 村 俊 也

目 次

0. 出発点あるいは到着点？
1. ソーシャルワーカー、その専門性の条件
 - 1-1. ソーシャルワークへの疑念、その「科学性」
 - 1-2. ソーシャルワークへの疑念、その「独自性」
 - 1-3. ソーシャルワークの苦悩—理論と実践の乖離
 - 1-4. ソーシャルワークの回答の試み—中村雄二郎の「臨床の知」を手掛かりに

（以上第21巻第1号）
2. 「臨床の知」からM.ポランニーの「個人的知識」、「暗黙知」へ（以下本号）
 - 2-1. 「科学の知」その特質
 - 2-1-1. 「科学の知」の説得力
 - 2-1-2. 「科学の知」の3つの原理—普遍主義—
 - 2-1-3. 「科学の知」の3つの原理—論理主義—
 - 2-1-4. 「科学の知」の3つの原理—客観主義—
 - 2-2. 「臨床の知（パトスの知）」その特質
 - 2-2-1. 「科学の知」へのアンチテーゼとしての「臨床の知（パトスの知）」
 - 2-2-2. 「臨床の知（パトスの知）」の3つの特色
3. 暫定的なまとめ - そしてM.ポランニーへ
 - 3-1. 「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」が意味するもの

3-2. 残された課題—M.ポランニーの「暗黙知」、「個人的知識」へ—

2. 「臨床の知」からM. ポランニーの「個人的知識」、「暗黙知」へ

2-1. 「科学の知」その特質

2-1-1. 「科学の知」の説得力

まず、確認しておかなければならないのは、中村の「科学の知」に関する以下の引用する論考が、1992年の『臨床の知とは何か』までのものであるということである。この段階では、量子論における観測の問題、つまりハイゼンベルク（W. Heisenberg）の「不確定性原理」への言及はあるが、クーエン（T. Kuhn）のパラダイム論から「社会構成主義」に至る一連の流れや、「複雑系」や「非線形性」などといった新しい概念は取り扱われていない。中村の議論は、あくまでも「一般的」に理解されている「近代科学」についてであって、「科学性」のゆらぎがクローズアップされてくる「現代科学」についてではないことは了解しておく必要がある。上述のパラダイム論や「社会構成主義」、「複雑系」や「非線形性」などの観点や概念のもつ意味や意義については、ソーシャルワーク論の「科学性」を考察する上でも、念頭に置かれるべきなので、いずれ筆者も考察していきたいと思っているが、まずは論を進めていくこととする。

さて、「近代科学」について、中村は以下のように語っている。「近代科学ほど、人類の運命を大きく変えた人間の所産はほかに例がない。あまりに強い説得力をもち、この二、三百年來文句なしに人間の役に立ってきたために、私たち人間は逆に、ほとんどそれを通さずに〈現実〉を見ることができなくなってしまったのである」¹⁾。実は、単に「現実の見方」を規定しているだけでなく、科学的な装いを纏ったものへの盲信さえも生じさせているのではないか。

池内は『疑似科学入門』の中で、次のように述べている。「マイナスイオンやクラスター水など、効果が証明されていないにもかかわらず持て囃される商品、ダイエットや健康に良いという謳い文句だが使い方によっては逆に

病気を引き起こしかねない健康食品、ベータカロチンとかセロトニンとかの専門用語をうまく使って効能があるかに見せかける食品など、科学を援用してはいるがそれに見合うだけの実体があるかどうか疑わしい商売がある。今や物品の販売には科学を利用しなければならず、テレビで取り上げてくれれば一段と信用がついて売れ続けるという。」(池内、2008)²⁾。付け加えるなら、科学的なイメージの肩書を持つ人物を登場させることで、さらに説得力が増すよう工夫している意図が見て取れる。

さらに、これほどの強い説得力を持つに至った「科学の知」の「現実の見方」の特徴について、中村は「科学の知は、事物を対象化し操作する方向で、因果律に即して成り立っている。そしてそこでは、見るものと見られるものとは否応なしに分裂し、そこに冷ややかな対立がもたらされる。」³⁾と述べている。見るものは、自らが問われる立場にない、あたかも「神」の視点、人間が介入する余地のない、逆にいえば、人間として、また個人として、何らかの責任を問われることのない立場に立つものである。この人間が介入しないということが、「客観性」を有しているというイメージに結びついてきた。ただし、既述のハイゼンベルクの「不確定性原理」によって、自然科学の典型的な領域である理論物理学においても、実は観測するという人間の行為が結果に影響を与えていることは周知のとおりである。

また、中村は「一般的にいて、近代科学が無視し、軽視し、果ては見えなくさせてしまった〈現実〉あるいはリアリティとは、いったいなんだろうか。(中略) その一つは〈生命現象〉そのものであり、もう一つは対象との〈関係の相互性〉(あるいは相手との交流)である。この二つは互いに結びついている」⁴⁾とも述べている。中村にとって、「生命現象」(主として人間の営為が想定されている)の本質は、他の個体を含めた環境との「関係の相互性」だと考えているからであろう⁵⁾。わざわざ指摘するまでもなく、この考え方は、既述の生態学的アプローチと親和的なのは明白である。

ソーシャルワーカーたちも、上記の批判から免れることはできない。リッチモンド以降の、多くのソーシャルワーカーが精神分析学に全面的に依拠

していた時期、クライアントが問題を抱えるに至った原因を、クライアントを取り巻く外的要因を考慮することなく、場合によってはクライアントの過去の出来事の記憶が封じ込められていると考えた無意識領域に立ち入ってまで、内的要因の中で特定しようと試みられていたし、ともかくも特定できたと信じていた。そして、因果律に即し、特定の原因があるため、ある現象すなわち支援を必要とする現象が生じたのであれば、その特定の原因を精神分析学の示す方法によって除去、換言すれば治療することによって問題は解決するという前提に立っていた。ソーシャルワーカーは治療者（セラピスト）であり、クライアントは治療される者であった。そして、クライアントは分析の対象であり、治療という名の下で操作されていた。精神分析学を基盤としないアプローチ論の出現によって、精神分析学の影響が薄れたのちも、依然としてクライアントは分析の対象であり、「援助するもの」と「援助されるもの」の対立構造は、長らく変わることはなかったのである。⁶⁾

冒頭に掲げた「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」の課題③「多くのソーシャルワーク研究と理論は、サービス利用者との双方向性のある対話的過程を通して共同で作り上げられてきたものである」というフレーズのもつ意義は、ここにある。「双方向性のある対話的過程」は、ソーシャルワーク論のコンテキストにおいては、主にソーシャルワーカーとクライアントとの面接場面での、準言語的、非言語的なものも含めた、対等関係でのメッセージのやり取りに典型的に現出してくる。クライアントから、いかに多くの学びを得たかについては、数多くの著作、論文、事例研究で指摘されている。筆者自身、現場のソーシャルワーカーであった時期も実感していたし、現在も同様である。面接はソーシャルワーカーのみでは、もちろん成立しない。ソーシャルワーカーとクライアントとの相互作用が展開される場である。支援過程の展開においても、また同様である。

2-1-2. 「科学の知」の3つの原理—普遍主義—

さて、近代科学が強い説得力を持つにいたった要因について、中村は以下

のように述べている。「近代科学が古今の数ある理論や学問のなかで特別の位置を占めたのは、なにゆえであろうか。（中略）近代科学が十七世紀の〈科学革命〉以後、〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉という、自分の説を論証して他人を説得するのに極めて好都合な三つの性質をあわせて手に入れ、保持してきたからにはほかならない。これらの三つの性質は、それまでの多くの理論にも個別的には見られたものの、互いに相容れず、両立できないと見なされていた。ところが、近代科学の誕生においてはじめて、それらは、結びつけられ、統一されることによって異例の力を発揮するようになったのである」⁷⁾。

これら3つの性質、主義について、「まず第一に、普遍主義であるが、これはデカルトの幾何学的な〈無限空間〉やニュートンの物理学的な〈絶対空間〉に典型的に見られるように、事物や自然を基本的に等質的なものと見なす立場であり、それによれば、事物や自然はすべて量的なものに還元されることになる。したがって、地域的、文化的、歴史的な特殊性は簡単に乗り越えられて、同じものがどこにでも通用することになるのである」⁸⁾と、中村は述べている。

その根底には「斉一性の原理」すなわち、場所や時間を選ばず、法則は成立するという前提がある。ガリレオの落下の法則は、ピサの斜塔においてであろうと、法隆寺の五重塔においてであろうと成立する。また、今日成立していた法則は、明日も成立するはずである。明日、これまで落下していた物体が、明日になれば上昇するとはだれも想像だにしていない。

西洋が手に入れた「科学の知」は、人類の最先端の知であり、「斉一性の原理」によって、地球上のあらゆる民族や集団、個人にも適用可能であるとみなされていた。適用できない場合は、「科学の知」を見直すのではなく、発展段階が低位であるか例外的であるか、あるいは、その両方であるとみなされ、軽視の対象となった。「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」の課題⑤として挙げた「植民地主義の結果、西洋の理論や知識のみが評価され、諸民族固有の知は、西洋の理論や知識によって過小評価され、軽視され、

支配された」というセンテンスの意味はここにある。「諸民族固有の知」の地域的、文化的な固有性は、歴史的に十分な発展段階に到達しえていないことを単に意味していると考えられてきた。自然科学に範をとった一部の経済学の領域においては、発展段階の基準は、数値化されたGNPやGDPのような単純な指標であった。

池内の「分離と流れ作業という『合理的な』生産方式による大量生産の実現は大量消費社会を導きだして世界を席卷し、人々の生活向上に大いなる寄与をした。(むろん、植民地主義という露骨な搾取の上に立ってのことだが。)それは傲慢なヨーロッパ中心主義ともつながっていった。自らの生活様式こそ合理的だとして『遅れた』地域に押しつけるという非合理が罷り通ったのである」⁹⁾という指摘に代表されるように、「科学の知」の支配的構造が存在してきた。冒頭では引用していないが、「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」の「注釈」の中の「中核となる任務」のパラグラフにおいて、「経済成長こそが社会開発の前提条件であると従来の考え方には賛同しない」と明確に謳われている。

これまで、日本でも、最先端だというイメージが強かった米国の理論を翻訳し研究することがソーシャルワーク論の中心であった。ところが、多様な文化、言語、宗教、民族的な背景を持つ世界の国々で、米国の理論が普遍的に、かつ完全に妥当するはずはない。妥当しないのは、米国に比べ「遅れた」社会だからという理由でもない。日本も例外ではなかった。例えば有名な「バISTEックの7つの原則」がある。最初の原則は「個別化」の原則である。多民族国家である米国社会においては、日常的に、ソーシャルワーカーと異質な文化、宗教を背景に持つクライアントがいる。そこで、偏見や先入観にとらわれないこととしての「個別化の原則」が意味を持つ。一方、表面的には「単一民族国家」と言われている日本においては、すべての人々が同質だと決めつけないために「個別化の原則」が意味を持ってきたのである。もちろん日本独自のソーシャルワーク論の構築の必要性が提唱され、それに取り組む研究者も少なからず存在した。それは、他国でも同様であろう。「ソー

「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」の「定義」のパラグラフで「この定義は、各国および世界の各地域で展開してもよい」と謳われている。「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」の、課題⑥として挙げた「西洋の歴史的な科学的植民地主義と覇権を是正」するために、日本を含めた各国および世界の各地域で、どう実際に展開していけるのか、特に日本においては正念場であろう。

ソーシャルワーカーにとって、すべてのケースは特定のものである。個人や集団、家族、地域はすべて特定の存在であり、同じ個人や集団、家族、地域であっても時期や場所、取り巻いている環境が異なれば、やはり特定のケース・実践環境となる。例外的なケースという理由で支援しないことはありえないし、そもそも例外的という概念は存在しない。「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」の、課題④として挙げた「特定（specific）の実践環境に特徴づけ（informed）られる」の意味はここにある。もちろん、実践環境に特徴づけられるのはソーシャルワーク実践である。全世界の人々の、あらゆる特定のケースに対して、その特徴に応じたソーシャルワーク実践が、例えば言語化され明文化され、多くの人に知られることがないとしても、全世界で日々に行われているのである。

2-1-3. 「科学の知」の3つの原理—論理主義—

さて、中村の所説に戻り、検討を続けていきたい。「次に第二に、論理主義についていえば、これは、たとえば分子生物学のDNA二重螺旋説による生命体の解明のように、基本的にあるいは出発点として、事物や自然のうちに生ずる出来事をすべて論理的な一義的因果関係によって成り立っているとする立場であり、それによれば、すべての出来事はこのような一義的因果関係によって捉え、認識できる、ということになる。したがって、もしも事物や自然のうちに或るメカニズムが見出されれば、その技術的な再現が、さらには制作が、可能になるのである」。¹⁰⁾

まず、中村のいう「一義的因果関係」の定義について、確認しておきたい。

「一義的」は「多義的」の対義語で、一つの解釈しかありえず多様な解釈を許さないという意味である。「因果関係」が「一義的」ということは、「因果関係が成立するのは一つである」ということを意味する。吉永は「要素還元論の立場に立てば、その直接的帰結として『全体の機能的変化は部分的要素の物質的変異と一対一で対応している』という考え方ができる。機能と要素のとのこの一対一の決定論は科学的思考にとってまことに強力的武器であった。(中略) 医療の場合も、症状の一セットに一つの病因を特定し、さらにはその病因の一セットを対応させるというのが、西洋医学の基本的な考え方だ」と述べている¹¹⁾

一義的因果関係の意匠を纏わせている論理主義が、滑稽なまでに科学性を失った例を紹介しておきたい。近年、DNAから人間の営みを説明した著作が、数多く存在している。そもそも、ドーキンス (R. Dawkins) の「利己的な遺伝子」(紀伊國屋書店、増補新装版、2006) が、大きな反響を呼んでからであるようだ。その通俗版が、竹内久美子の各著作(代表的な例が『そんなバカな』、文書文庫、1994) である。一つの特定のDNAの存在が、一つの特定の特徴を必ず発現させるという一義的な因果関係に基づき、「利己的」なDNAが人間に「利己的」な振る舞いをさせるという「メカニズム」から、すべての人間の営み、例えば嫁と姑が反目しあうなどを説明、「解釈」してみせる。どのような行動も「解釈」しようとするばできてしまうので、前章の注にある、ポパーが紹介した精神分析学と同様、「反証可能」性ない。結局、ただのエッセイなのである。すべての読者が、この「メカニズム」を信じるとは到底思えないが、ベストセラーになっていることを考えると、それなりの説得性を感じる読者がいるのかもしれない。

そもそも、DNAの二重螺旋構造の解明に伴って誕生した分子生物学が主張したのは、生物は、物理や化学の法則に沿った「機械」であり、DNAは「情報」であって、この2つのパラメーターによって、すべての生命現象が解けるということであった。この分子生物学の考え方から、上述の竹内の考え方まで、さほど距離はない。

もちろん、すべての生命現象が解けることはなかった。上述の吉永は、「“分子革命”から現在へ至る単純なDNA還元信仰は、歴史的には短いエポックで終わるのかもしれない。もちろん、DNAの解析は必要不可欠なことだし、今後ますます発展するだろう。だが、ポスト分子生物学に要求されるのは、DNAなりゲノムなりを複雑系として見る発想である。そういう状況は現在すでに、部分的にせよ着実に進行している」と述べている¹¹⁾。

ソーシャルワーカーが直面するクライアント、個人や家族が抱えている問題を、論理的で一義的因果関係によって把握できるケースは、まず考えられない。もっとも多くの場合、問題を生じさせている要因となっているのは、筆者の経験上、貧困、経済状況であることは間違いないが、すべてのケースにおいて唯一の原因であるとはいえない。複数の要因が他の要因と常に相互作用下にあり変容していく。例えば、個人とその家族の関係だけに限定したとしても、家族成員が「複雑系」を形成しており、家族関係への介入は容易なものではない。あくまでも筆者の経験からであるが、家族という社会資源が存在しない身寄りのない単身者の場合の方が、家族がいる場合より、支援しやすい印象がある。単身者の場合は、ソーシャルワーカーとのラポールを前提に、現状を把握しながら、本人の望むゴールに向けて協働作業によって支援していくことが可能な場合が多いからだ。様々な側面を考慮し家族に介入し家族調整することは困難であり、筆者の場合も、最善の努力を傾注したにもかかわらず、結果的には明確に失敗に終わったケースを経験したことがある。単一の要因を特定してしまうのではなく、多様な要因をゲシュタルト的に統合しうる概念、ツールが必要なのである¹²⁾。

2-1-4. 「科学の知」の3つの原理—客観主義—

中村の所説に戻り、検討を続ける。「最後に第三に、客観主義であるが、これは、たとえば脳科学によって脳の高度な活動を諸々の連合野の働きから成る客観的なメカニズムとして解明し、また治療に役立てるように、事物や自然を扱う際に、扱う者の側の主観性を全く排除して、それらを対象化して

捉える立場であり、それによれば、事物や自然は扱う者の気分や感情に左右されずに、ありのままに捉えられ、扱われる、ということになる。したがって、そのようにして捉えられた客観的なメカニズムは、他のなにものにも依存することなく、自律的に存在しうることになるのである¹³⁾。

ソーシャルワーカーは、もとより完全に「自律的」には存在しえない。クライアントが存在していなければ何もできないし、クライアントの「主観性」を無視して支援がすることもありえない。対人関係を伴う多くの専門職や職業人に共通していえることである。現場での経験を重ねると、クライアントの「主観的」事実と「客観的」事実が一致しないケース、むしろ齟齬をきたすケースが多いことに気づく。その典型的な例が、認知症を抱えているクライアントの場合である。食事をしたことそのものが記憶に残らないクライアントは、食べ終わった後、程なく食事がまだなので食事をしたいと訴える。同居している家族は、もちろん食事を済ませたことを記憶しているので、その事実をクライアントに伝えるが、クライアントは納得しない。例えば、食事をした後の食器を証拠として見せても、効果はない。クライアントは、家族が食事をさせてくれないと、第三者に訴える。客観的には食事をしたことが事実であるが、クライアントにとっては食事をしていないことが事実、真実であることを前提にソーシャルワーカーやケアワーカーたちは対処法を家族とともに工夫する他はないのである。

一方で、専門職はボランティアと異なり、自らの「主観性」も必ず発動することを知っているし、そのことが支援に際し妨げになる場合が間々あることも知っている。それゆえ、「転移」や「逆転移」現象に気を配り、ケースによって適切な距離は様々だが、クライアントとの適切な心理的な、また物理的な距離に気を配る。それは、ソーシャルワーカーがクライアントの主観性を排除することはできないし、クライアントの気分や感情を考慮しないことはありえないことに起因する。ところで、適切な距離は、どのように判断するのであろうか。

この適切な距離ということに対して、前章の注で引用した河合と鷺田の対

談集、『臨床とことば』から、やや長くなるが大変興味深いので引用してみたい。

「鷺田 ケアとか看護といったシーンで、いちばん難しいけれどもいちばん大切なのが、『距離』でしょうか。（中略）

河合 その人間と人間の距離感覚みたいなものが難しいですね。

鷺田 医学では基礎医学、臨床医学というのがありますけれども、基礎と臨床ということを、言葉でいうとすると、ある意味で基礎というものでは、現実に見えてくる現象の世界から距離を取って、目にはこう見えているけど実はこういう法則でこうなっているんだよ、というような距離の取り方をしますよね。

河合 それは近代科学の場合は、きれいに完全に切るわけですから。（中略）

鷺田 その距離ということが、実は本当は臨床における距離というのは基礎の距離よりもはるかに方法論で身に付ける、つまり、この方法論を学んだら、皆同じように距離の取り方がわかるというんじゃないやつですよ。たとえば臨床心理学でもそうなんじゃないですか。つまり、先に方法があって、臨床心理学ではこういう方法でやります、あるいは、患者さんの前ではこういう態度を取りますという方法論をやってから、じゃ現場でというわけにはいかない？

河合 いちばんいいかないです。それが臨床の一つの定義でしょうね」（下線は筆者による）¹⁴⁾。

既述のように、ソーシャルワークの養成教育に関しても同様である。方法論を知識として十分に理解し、演習を通して実践のプロセスを構想することができたとしても、経験を積んだソーシャルワーカーと同じレベルで、すぐに現場で実践活動を展開することは、まず不可能である。なぜであろうか。次節では、「科学の知」のアンチテーゼとしての「臨床の知（パトスの知）」に関する考察へと進めていきたい。上述の答えも、すぐに明らかになるはずである。

2-2. 「臨床の知（パトスの知）」その特質

2-2-1. 「科学の知」へのアンチテーゼとしての「臨床の知（パトスの知）」

中村は、人間の弱さの自覚の上に立つ知を「パトスの知」と呼ぶ。「パトス」は「受苦」もしくは「受難」と訳される。「パトスの知」は、自らの身を晒すことで発揮される知であるが、中村の論理展開を追っていくと、とりもなおさず「臨床の知」であると理解してよいようである。以下の引用において、両者は等価なもの、言い換えと見なして論を進めていくこととする。さて、中村は「臨床の知＝パトスの知」は「科学の知」と比較した場合、感覚の側面と環境や世界に対するスタンスの二つの側面から特徴づけられると述べている。

感覚的側面の特徴として、中村は「科学の知が冷ややかなまなざしの、視覚の知であるのに対してパトスの知は身体的、体性感覚的な知であるということが出来る。ここで体性感覚というのは、触覚、筋肉感覚、運動感覚を含む全身の基礎的な感覚である」¹⁵⁾と述べている。ケアワークに従事する専門職（看護、介護、保育）においては、身体的接触が不可避であるため、身体的、「体性感覚」的な知の重要性は、容易に理解することができよう。しかし、これはソーシャルワーカーにも、カウンセラーにも当てはまることである¹⁶⁾。

面接場面において、クライアントのメッセージを理解しようとする場合、またクライアントに何かしらの意味を有するメッセージを発信する場合などにおいて、ソーシャルワーカーも五感を総動員して統合し相互行為に臨む。表情、視線はいうに及ばず、姿勢や所作や、醸し出す雰囲気なども感じとらねばならないし、自らも、それらを総動員して伝達するスキルが求められる。明確な音声言語として表現されたことよりも重要であるといっても過言ではない。例えば、何らかのソーシャルワーカーの提案に対して、クライアントが納得した旨の言葉を発したとしても、実際は納得していないままであることは、しばしば起こりうることである。筆者も、感覚的には違和感を抱きながらも、発せられた言葉に引きずられ判断した結果、失敗したと判断せざる

をえないケースを経験している。

事例集やインシデント・プロセス法の基づく文章化された事例研究の有効性を否定するつもりは全くないが、文章化されているものは「冷ややか」ではないにしても、「視覚」的に読むという行為によって理解することが中心とならざるをえない。その結果、抜け落ちてしまうことがあるかも知れないことを念頭に置いておく必要があろう。前章の末尾の「方法論を知識として十分に理解し、演習を通して実践のプロセスを構想することができたとしても、経験を積んだソーシャルワーカーと同じレベルで、すぐに現場で実践活動を展開することは、まず不可能」な理由は、すでに明確になったのではないだろうか。

では、環境や世界に対するスタンスという側面からはどうであろうか。中村は「科学の知が操作の知であるのに対して、パトスの知は環境や世界がわれわれに示すものをいわば読みとり、意味づける方向で成り立っている。それは、われわれのまわりにあるすべての物事の兆候、徴し、表現について、それらのうちにひそむ重層的な意味を問い、私たちに襲いかかるさまざまな危険に対処しつつ、濃密な意味をもった空間をつくり出す知である」¹⁷⁾。と述べている。「私たちに襲いかかるさまざまな危険」とはなんであろうか。一つは「科学の知」をもってしても対処できない自然の脅威である。もう一つは、「科学の知」そのものが生み出した脅威が存在していることに注目する必要がある。それは、水俣病を初めとする公害であり、福島第一原発事故のような人災である。さらに、近代が作りあげた政治や社会、経済構造に起因する脅威も看過してはならない。

これらのことについて、ソーシャルワーカーは無頓着であったわけではない。「社会福祉士の倫理綱領」¹⁸⁾の「前文」で、「われわれは、社会の進展に伴う社会変動が、ともすれば環境破壊及び人間疎外をもたらすことに着目する（後略）」と謳われている。IFSW・IASSWの「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」や、全定義であるIFSWの「ソーシャルワーク専門職の定義」では、このような視点からの定義は存在していない。この一文は、「わ

れわれは平和を擁護し（後略）」という一文とともに、日本独自の誇るべき視点であると強調しておきたい。

また、「濃密な意味をもった空間」とは、何であり、どこに形成されるのであろうか。まさしく、この空間が、場としての臨床なのである。臨床の場は、単に人と人とが空間、時間を共有する場であるだけでなく、そこに相互作用・行為、対話によって意味を作り出す場でもある。ソーシャルワークの面接場面を想定して、筆者の経験をもとに、パラフレーズしてみたい。まず、クライアントとソーシャルワーカーがラポールを形成し、空間、時間を共有することによって、環境や世界から切り離され孤立した状況に陥っていたクライアントが、世界内に自分の居場所があり、自分がいることに意味があるという感覚を、再び取り戻すことが可能となる。そして対話（明確な言語による場合に限定する必要はない）を通して、クライアントはモノログからダイアログの世界に移行する。そして、クライアントは、環境や世界が自分に示すものを、再度、読みとり、解釈し、意味づける作業に、ソーシャルワーカーとともに着手することとなる。

人は本質的に時間の流れの中で生きる存在であり、人は自らの生を意味ある連関として認識したいと欲し、また意味ある連関であるよう解釈しようとする。自然科学の常識的視点から見れば、過去が原因で現在が結果である。そして未来は現在の内に潜在し、現在が原因となって未来が結果である。しかし、人の過去、現在、未来は単線的な因果関係にあるのではなく、相互規定的である。

未来に希望を持てる時、現在は意味あるものとなる。逆に、未来に希望を持ってない時、現在は意味を失う。逆に、通常は変えようがないと思われている過去の解釈、意味も、現在の状況に連動し常に変動するのである。言い換えるなら、現在は常に未来によって、過去は常に現在によって再構造化される。意味は一義的に存在しているのではなく、多様な解釈がありうる重層的、多義的なものである。この未来への展望を協働作業によって作り上げることによって、クライアントの時間の再構造化を行う場、それは現在の意味

のポジティブな再構築を行う場、また、現在の意味によって過去の意味もポジティブに再構築する場が、面接の場や支援の各局面での場であり、また臨床の場である。

それは、ソーシャルワーカーにとっても当てはまることである。面接の場で、支援の各局面の場で、他者や共同体や社会との相互作用の文脈において、ソーシャルワーカーは、自らの今ここでの行為の意味を問いつつ、クライアントにとって、自分自身を必要とされる意味を創出する。この意味が、自らのアイデンティティを形成するのである。アイデンティティを形成できなければ、いずれバーンアウトしてしまうであろう。

2-2-2.「臨床の知（パトスの知）」の3つの特色

さて、「臨床の知（パトスの知）」の特色について、中村はどのように考えているのだろうか。中村によれば以下の三点に纏められるという。まず、「一、近代科学の知が原理上客観主義の立場から、物事を対象化して冷やかに眺めるのに対して、それは、相互主体的かつ相互行為的にみずからコミットする。そうすることによって、他者や物事との間にいきいきとした関係や交流を保つようにする」¹⁹⁾である。他者との間のいきいきとした関係や交流の根底には、「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」のキーワードの一つである「双方向性のある対話的過程」が存在している必要がある。諸個人の「善き生の構想」の実現がウェルビーイングであるが、共同体や社会が、その実現を阻害することなく、促進していく構造を備えていなければ、現実性は乏しい。諸個人の双方向の対話によって、各々の諸個人の「善き生の構想」の実現を現実化しうる共同体や社会の在り方を考えていく必要がある。一方、諸個人の「善き生の構想」が互いに相容れない場合も当然に生じうる。自由に競争原理に解決を委ねる道を選ばないのであれば、相互の交流や対話により「調整」の道を模索することが必要になってくる。

あるクライアントに対してソーシャルワーカーが支援することによって、競争に有利なることは十分考えられることである。その結果、そのクライア

ントが競争によって勝利を勝ち取ることができる可能性は高まる。しかしながら、このソーシャルワーカーは、敗者となったために何らかの支援を必要とする状況に陥った新たなクライアントを、自らの手で生み出すこととなる。これは、ソーシャルワーカーのアイデンティティの崩壊を意味する。したがって、以下の結論が得られる。すなわち、少なくとも社会の構成原理を「自由」にのみおく、リバタリアニズムの信奉者ではソーシャルワーカーはありえないということである。もっとも、リバタリアニズムは基本的には財の再分配機能、移転に基づく社会保障、社会福祉制度を自由権の侵害として認めないし、であればソーシャルワーカーは社会的必要性がないことになる。ソーシャルワーカーは、財やサービスの再分配機能を備えているからである。

そこで、本来は個人レベルの概念であるウェルビーイングを、諸個人の対話によって、社会化する必要がある。社会化するためには、「自由」を尊重しながらも、何らかのシステムに基づく「自由」の「平等」化という「社会正義」とも関連する原理が必要であるし、「公共性」という概念に関する考察も必要である²⁰⁾。それは、冒頭に示した「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」における「集団的責任」の原理、すなわちソーシャルワーカーが、「あらゆるレベルにおいて人々の権利を主張」し、「人々が互いのウェルビーイングに責任をも」つことを促進するためである。この「集団的責任」の原理は、他の対人支援の専門職、医師や看護師、弁護士、ケアワーカーなどでは原理として掲げられていないものである。「人権」を「社会正義」の観点から考えたときに現れてくる「集団的責任」という原理を加えた、相互に関係性を持つ3つの社会の構成原理に基づいてソーシャルワーク実践が展開されるということに、「独自性」が存在していると、筆者は考えている²¹⁾。冒頭で掲げた課題②に対する筆者なりの現段階での解答でもある。

ところが、このことに関して、社会福祉士もしくは精神保健福祉士という国家資格がソーシャルワーカーの専門職として制度的に存在しているがゆえに、制約を受けざるを得ない状況にある。ことに、社会福祉関係のみなら

ず医療関係や労働関係、民法関係などの諸制度が頻繁に改正されるたびに、ソーシャルワーカーは、その内容を理解し、活用方法に頭を悩ませることに忙殺され、社会全体との関係や交流を保つための時間的ゆとりを奪われてしまう。ましてや、「社会変革」に取り組むことは、法人と雇用関係にない、ごくまれなソーシャルワーカーの場合を除いて、極めて困難である。であればこそ、日常業務の遂行中でも、他者や物事との間にいきいきとした関係や交流を保つことについて、そして公共性ということについて、常に関心を持ち続けていくことが望まれるのではないだろうか。

次に、中村は「二、近代科学の知が普遍主義の立場に立って、物事をもっぱら普遍性（抽象的普遍性）の観点から捉えるのに対して、それは、個々の事例や場合を重視し、物事の置かれている状況や場所（トポス）を重視する。つまり、普遍主義の名のもとに自己の責任を解除しない」²²⁾ という特徴を挙げている。ソーシャルワーカーが、常にケーススタディを繰り返すのは、すべてのケースが独自性を帯びているからである。既述のように例外として捨象して構わないケースはない、例外という概念はない以上、あらゆるケースに対して自己の責任を解除しない、支援を断念しない、放棄しないのは当然のことである。

しかしながら、多様なケースの中には、現実的に支援継続が困難な状況に陥る場合もある。筆者が現場のソーシャルワーカーであった頃は、このようなケースを「処遇²³⁾ 困難事例」と、しばしば呼んでいた。困難さが、クライアントの個人的な要因から生じている、例えばクライアントの性格や能力などの個人的要因から生じていると断じて処理してしまわないことである²⁴⁾。重層的な要因から解決すべき問題が生じているため、ソーシャルワーカーが対応しきれないがゆえに支援が困難なケースのこととして理解すべきなのである。実際は、筆者の担当したケースを振り返ってみると、ソーシャルワーカーの力量が不足しているため、もしくは、ソーシャルワーカーが支援の過程で不適切な対応や介入をしてしまったため、支援継続ができなくなってしまう場合もあった。必要なのは、職場や職能団体における経験豊か

なソーシャルワーカーによるスーパービジョンが機能する場の存在である。スーパーバイザーの経験知がスーパーバイジーに伝達されるとともに、スーパーバイジーの直面した「処遇困難事例」が、単に個人的に知識にとどまることなく、他のソーシャルワーカーに共有されることである。これらのプロセスを通して、自らの経験を内省（reflection）し、省察（meditation）することが求められる、この作業が極めて重要なのである。その契機として、研究者と現場の実践者との各種研究会、研修会が有効に働くことが求められている。

最後に、中村は「三、近代科学の知が分析的、原子論的であり論理主義的であるのに対して、それは総合的、直感的であり、共通感覚的である。つまり、目にみえる表面的な現実だけではなく深層の現実にも目を向ける」²⁵⁾ という特徴を挙げている。この「共通感覚」というタームは、既述の「体性感覚」と同様に中村雄二郎の論考の中核的概念といえる。「共通感覚」という概念は、デカルト（R. Descartes）とアリストテレス（Aristoteles）からインスパイアされたものであると中村自身が述べている²⁶⁾。デカルトは「心身相関」の場を脳の一部、松果腺と考え、その機能の働きを「共通感覚」と呼んだ。アリストテレスにおいては、多様な感覚を、中村がいうところの「体性感覚」を、理性の働きによって統一する際に諸感覚を比較し識別する感覚を意味している。つまり、「共通感覚」は理性を含む感性であり、理性と感性の不可分性を根拠づける概念である。

ソーシャルワークの場においても、理性と感性の不可分性は、常に実感するところである。問題は、専門職の専門性がどこにあるかということである。不可分である以上、専門的な理性と、専門的な感性の双方であるという解答は容易に得られるが、専門的な理性は、専門的な各種の知識を備えていることを前提に行われる、支援の過程における現状認識や把握、各種の判断などの行為の際に必要とされるという理解が可能である。ところが、専門的な感性に関しては、事情は異なってくる。ソーシャルワークの臨床の場における感性や感覚の重要性は、言語的に伝達されること、そして理性的に理解する

ことは可能であっても、実際に臨床の場で、感性や感覚を働かせることは同一ではない。感性や感覚を磨くことは、臨床の場でなければ、極めて困難なことである。ましてや、理性と感性を統合的に働かせることは、なおさらであるが、ソーシャルワークの知は、この働きを可能にすることを意味していると考えられなければならないのである。そして、この知が身についたときに、抽象的、普遍的な論理構造を持つソーシャルワーク論が、新たなる光芒を放ち、その深層的な意味が理解できるようになるのだと、筆者は考えている。

冒頭の「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」の「知」の параグラフでの検討すべき課題①、「ここでは、「科学」を「知」というそのもっとも基本的な意味で理解するとは、いかなることであるか」という問いに関して、直接的には「ソーシャルワークは、複数の学問分野をまたぎ、その境界を越えていくものであり、広範な科学的理論および研究を利用する」という、対象領域を限定しない越境的な、ソーシャルワークという人間の行為にかかわる「科学的」な「知」を意味していると考えられる。しかし、上述のように、この「知」を理性的でありかつ感性的なものとして、筆者は考えていくべきであると思っている。

さて、中村は「〈臨床の知〉は、科学の知の三つの構成原理を先のように端的に、（１）普遍主義、（２）論理主義、（３）客観主義と呼ぶとき、そのそれぞれに対して、（１）コスモロジー、（２）シンボリズム、（３）パフォーマンスと私が呼ぶものを構成原理としている」と述べている²⁷⁾。そして、「まず、第一にコスモロジーであるが、これはなによりも、場所や空間を—普遍主義の場合のように—無性格で均質な拡がりとしてではなくて、一つ一つが有機的な秩序をもち、意味をもった領界と見なす立場である。したがってまた、ここにおいては、個々の場合や場所（トポス）が重要になる」²⁸⁾と定義づけている。

農業や漁業に従事している方を念頭に置いて欲しい。全国の天気予報に関しては、気象予報士ほどは予報できないであろうが、行動範囲内の地域に関

しては確実性の高い予想が可能である。それは、「体性感覚」という感性に基づき、数多くの経験の中で身に付けた「経験知」に基づく相関関係による判断という理性の働きによって、つまり「共通感覚」によって予想しているであろう。もちろん、ここでは雲の流れなどの視覚的情報のみならず、触感による空気の質感や、嗅覚による空気の匂いなども含めた多様な諸感覚を比較・識別され統合されているはずである。どう統合しているのか、そして最終的な判断の基準は何かについては、おそらく当人も言語化し説明することは不可能かも知れない。しかも、固有の場所を前提とした基準であり、他の場所でも、そのまま基準として有効であるとは限らない。つまり、この基準は普遍性に乏しいが、自らの営為の場所においては、確実性が高い、したがって有用性のある予想が可能な「知」を有しているといえよう。もっとも、この「知」は、語感としては「知恵」という言葉の方がなじみやすいかも知れない。問題は、「経験知」を得るためには、ある程度、相関関係の再現性がなければならないことである。ソーシャルワークについてはどうなのだろうか。構成原理の第三の「パフォーマンス」の параグラフで、検討してみたい。

中村は、続けて「第二に、ここでシンボリズムというのは、文学上の象徴主義のような、限定された意味ではない。それは、抽象記号にではなくてことばによるように、物事をそのもつさまざまな側面から、一義的にではなく、多義的に捉え、表わす立場である。(中略) シンボリズムとは、物事には多くの側面と意味があるのを自覚的に捉え、表現する立場である」²⁹⁾。

数字で表現される法則は、ただ一つの解釈しかできない。これに対して、言葉は多義的な解釈を許す。それは、マイナスなのではない。ソーシャルワーカーの価値の根底である「人権」や「社会正義」という言葉から受けるイメージや理解が、異なる政治や社会、文化や宗教などの固有の背景を有する多様な諸個人によって異なることは当然である。そもそも「社会福祉」という言葉は、その最たるものであろう。しかし、社会の構成原理が多義性を帯びているからこそ、「双方向性のある対話的過程」によって、相互理解、

相互了解の試みが必要となってくる。

さらに、中村は「第三には、パフォーマンスであるが、ここでパフォーマンスとは、工学的な意味での〈性能〉のことでないのはもちろんのこと、しばしば誤って考えられているように、ただ体を使い、体を動かしてなにかをやるだけのことでない。体を使つての全身的な表現である場合もあるけれども、パフォーマンスであるためには、なによりも、行為する当人と、それを見る相手や、そこに立ち会う相手との間に相互作用、インタラクションが成立していなければならない」³⁰⁾と述べている。

ラポールを形成するのは、この相互作用を働かせるためである。上述したように、「経験知」を得るためには、ある程度の相関関係の再現性がなければならない。以下の記述は筆者の経験に基づくものであることをあらかじめ断っておく。ソーシャルワーカーも面接の経験を重ねると、それなりにカテゴライズする傾向が生じる。人間は、相関関係を理解することで、予測に基づく未来という時間軸を発見し、生き延びてきたのであるから、そのことは避けがたいことである。同一のケースが存在しないのは前提としてあるのだが、似たようなケースは、先行するケースでの経験から、ある程度の対応や支援の方向性を想定する作用が働くのである。ただ、何が再現されているのかを見誤ってしまうと意味がない。見誤りがなくとも、多くの場合、想定通りにはいかないのは当然である。しかし、この想定は、必ずしも無意味という訳ではない。出発点となるモデルを与えてくれるからである。ただし、ずれが生じた場合に察知できないと、重大な問題を生じさせてしまう。逆に、ずれが察知できれば、修正が可能となるだけでなく、そのケースの理解が進捗する。虚心坦懐にモデルを想定しないより、迅速かつ適切な支援が可能となる。端的に言えば、ヴェーバーの理念型（idealtypus）として機能するのである。

ところが、経験を積むと、クライアントに及ぼすソーシャルワーカー作用は意識していても、クライアントがソーシャルワーカーに及ぼす作用を意識しなくなる場合がある。それは、クライアントのことを過去の類似の経験か

ら理解していると思ひ込みがちだからである。こうなるとクライアントにソーシャルワーカーの「パフォーマンス」は通用しなくなる。その原因をクライアントに帰すると決めてしまえば、既述の「処遇困難事例」、クライアントの特殊性、例外性のためだと判断しかねない。ソーシャルワーカーは、クライアントからの作用を身に受ける用意がなければならない。ソーシャルワークの知は、既述の受け身の「知」、「パトスの知」であり、相手を操作する知ではない。このことが身をもって理解できたとき、さらにステップアップするのである。まさしく「多くのソーシャルワーク研究と理論は、サービス利用者との双方向性（interactive）のある対話的過程を通して共同で作り上げられてきたもの」なのである。

3. 暫定的なまとめ - そしてM.ボランニーへ

3-1. 「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」が意味するもの

以下は冒頭で箇条書きした検討すべきことを再掲し、さらに浮かび上がった課題となる課題もあるが、これまでの論考によって、明確になったと思われる到着点を整理し、まとめている。これが、今後の筆者の論究の出発点を示すものである。

- ① 「科学」を「知」というそのもっとも基本的な意味で理解するとは、いかなることであるのか。そもそも「科学性」とは何を意味するものなのか。
 - ・直接的には「ソーシャルワークは、複数の学問分野をまたぎ、その境界を越えていくものであり、広範な科学的理論および研究を利用する」という、対象領域を限定しない越境的な、ソーシャルワークという人間の行為にかかわる科学的な「知」を意味していると考えられる。しかし、ソーシャルワーカーの専門性は、専門的理性と感性の双方を備えていることだと、筆者は考えている。したがって、ソーシャルワークの「知」を理性的でありかつ感性的なものであり、従来、「科学性」に必ずしも依拠しない「知恵」と呼ばれていた要素も、「知」に取り戻すことが求められているのではないだろうか。そして、この知が身についたときに、

抽象的、普遍的な論理構造を持つソーシャルワーク論が、新たなる光芒を放ち、その深層的な意味が理解できるようになるのではないだろうか。ただし、この解答は、あくまでも暫定的なものである。「知」の構造に関して、さらに考察を深めていく必要がある。なお、断るまでもないが、近代の中村の指示している「科学の知」ではなく、科学の「知」を、筆者は否定してはいない。既述のパラダイム論や「社会構成主義」などについては、ソーシャルワークの知を確立するためにも、十分に考察する必要があると考えている。やはり、残された課題である。

- ② ソーシャルワークの研究と理論の独自性は、その応用性（applied）と解放志向性（emancipatory）にあるとすることが、他領域の研究、理論には見られない「独自性」なのか。そもそも、応用性や解放志向性という概念から、「独自性」という概念を抽出できるのか。

・少なくとも「応用性」に関しては、応用科学全般に共通する特性であり、「独自性」を構成するものとはいいがたい。また、「解放志向性」の「解放」が「人権」の一部と解釈できるのであれば、「人権」は対人援助関係専門職が共通して依拠する原理であるので、やはり「独自性」とは呼びえない。「集団的責任」の原理、すなわちソーシャルワーカーが「人々が互いのウェルビーイングに責任をも」つことを促進するという原理は、他専門職では掲げられていない「独自性」を有している。「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」における「社会変革と社会開発、社会的結束（中略）を促進する」という目的を示した箇所にも「独自性」は現れている。これからの筆者の課題は、「社会正義」や「公共性」に関する先行研究を踏まえ、ソーシャルワーク実践のコンテクストに沿って、換言すれば「社会変革と社会開発、社会的結束」と関連させながら、「集団責任」について綿密に考察することであると考えている。

- ③ ⑦「調査研究と実践評価から導かれた実証に基づく(evidence of based)知識体系に、その方法論の基礎を置く」という旧定義から、「多くのソーシャルワーク研究と理論は、サービス利用者との双方向性

(interactive) のある対話的過程を通して共同で作上げられてきたものである」という新定義へと転回が、何を意味し、どのような影響を実践・研究活動にもたらすのか。

- ・主にソーシャルワーカーとクライアントとの面接場面での、準言語的、非言語的なものも含めた、対等関係でのメッセージのやり取りに典型的に現出してくる。クライアントから、いかに多くの学びを得たかについては、数多くの著作、論文、事例研究で指摘されている。筆者自身、現場のソーシャルワーカーであった時期も実感していたし、現在も同様である。面接はソーシャルワーカーのみでは、もちろん成立しない。ソーシャルワーカーとクライアントとの相互作用が展開される場である。支援過程の展開においても、また同様である。ソーシャルワーカーは「神の視点」ではなく、同じ時代を共有している「人間の視点」に立つものである。
- ④ 「特定 (specific) の実践環境に特徴づけ (informed) られる」とは、何を意味し、どのような影響を実践・研究活動にもたらすのか。
- ・ソーシャルワーカーにとって、すべてのケースは特定のものである。個人や集団、家族、地域はすべて特定の存在であり、同じ個人や集団、家族、地域であっても時期や場所、取り巻いている環境が異なれば、やはり特定のケース・実践環境となる。例外的なケースという理由で支援しないことはありえないし、そもそも例外的という概念は存在しない。したがって、例外という概念を含むようなソーシャルワーク論は存在しえないはずである。実践環境に特徴づけられるのは、当然ソーシャルワーク実践である。今後の考察においては、一見すると矛盾するようだが、どのようにソーシャルワーク実践は特徴づけられなければならないかの個別的な指針を示しうる普遍的なソーシャルワーク論を目指していく必要がある。
- ⑤ ⑥西洋の歴史的な科学的植民地主義とは、何を指し示しているのか。そして、どう是正しようとしているのか。
- ・西洋が手に入れた「科学の知」は、人類の最先端の知であり、「斉一性の原理」によって、地球上のあらゆる民族や集団、個人にも適用可能である

とみなされていた。適用できない場合は、「科学の知」を見直すのではなく、発展段階が低位であるか例外的であるか、あるいは、その両方であると考えられ、軽視の対象となった。そして、自らの生活様式こそ合理的だとして、生活様式を「遅れた」地域に押しつけるという科学的植民地主義が展開された。この西洋の歴史的な科学的植民地主義と覇権を是正するために、「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」を、各国および世界の各地域で、その固有性に応じて、さらに展開し具体化していくことが求められている。日本においても同様である。

3-2. 残された課題—M. ポランニーの「暗黙知」、「個人的知識」へ—

前節の、論考の中で浮かび上がってきた課題以外に、その中で不十分なまま終わってしまっているのが、下記の課題である。共通していることは、ポランニーの「暗黙知」の概念に極めて近いのだから、他者への伝達が困難な「知」を、どう他者に伝えていくのか、ということである。

1-1-①ソーシャルワークの普遍的な価値や倫理といった土台を、どのような方法で、伝達し体得させるか。

1-1-②個々のソーシャルワーカーが得た個人的な知を、どのような方法で普遍化し、共有していくのか。

1-2-③有効的な支援を可能とし、指針を与えることのできる理論とは、どのような性質を持つものなのか、そして、どのような方法で構築していけばよいのか。

この課題に取り組むためには、ポランニーの「暗黙知」や「個人的知識」といった概念の分析が必要であると、筆者は考えている。本論では、論としてのまとまりや紙幅の関係から、意図的に、これらの概念について言及しなかったが、中村も、両概念について考察している。今後、このテーマについて論文として発表していく予定である。

本論の目標は、ソーシャルワークの知の分析である。個人レベルでは、個人が実践したこと経験したことを、どう知として明確化できるかという問い

がある。集団レベルでは、ソーシャルワーカー同士の知の共有、関連する他専門職との相互理解を、どうすれば可能かという問いがある。そして、マクロレベルの普遍的な社会を構成する原理や、普遍的なソーシャルワーク理論とミクロレベルの現場での実践との関係性はいかなるものであるかという問いがある。どの問いも、筆者がソーシャルワーカーとして現場にいた頃から抱き続けた疑問である。すべての問いに自分なりに考察し解答するためには、まだ時間がかかりそうであるが、いずれ実現した暁には、現場のソーシャルワーカーを中心とした多くの方たちにとって何らかの参考になれば、これに勝る幸せはない。

注

2 章

- 1) 上掲『臨床の知とは何か』、P 3。
- 2) 『疑似科学入門』、池内了著、岩波新書、2008、Piv。
- 3) 上掲『術語集』、P187。
- 4) 上掲『臨床の知とは何か』、P 5。
- 5) 近代科学が、実は人間の営為を捨象することで進歩、定着したことに関して、井上は「十八世紀以降のヨーロッパが、(中略)すべての根拠を『人間』に帰する、というイデオロギーを、誇らしげに打ち立てた、かつそれを実践してきた。ただし、それに逆らう唯一のものが存在した。それは科学である。つまり、科学は、人間にはどうにもならないもの、人間を根拠にできない唯一のものとして、社会のなかに座を得た」(『奇跡を考える—科学と宗教—』、村上陽一郎著、講談社学術文庫、P181～P182) と述べている。
- 6) 小松は、『『精神学的観点』はしだいに『フロイト派心理学』に依拠するようになってきたが、その与えた影響について、ブライアーとミラーは次のように要約している。『フロイト心理学は、ケースワークの外観を変えてしまった2つの重要な原則 (①行動は目的的であり、かつ決定

づけられている、②決定因のあるものは無意識であり、クライアント自身によって認識されていない）をもたらした。どんな行為も、気まぐれで、原因がないなどみなすことはできない。すべての問題は解いていくことができる。クライアントの外面生活をあまねく探求してその解決が与えられないとするならば、クライアントの内面世界へ深く突入していくことによって、治療への鍵が与えられるだろうとみなされた』と、述べている。（上掲『ソーシャルワーク理論の歴史と展開—先駆者にとどるその発展史—』P73。）因果律において原因であることが、クライアント自身によって認識されず、ソーシャルワーカーが「解釈」するものであれば、まさしく「反証可能」性を否定した理論である。

- 7) 上掲『臨床の知とは何か』、P 6。
- 8) 上掲『臨床の知とは何か』、P129。
- 9) 上掲『疑似科学入門』、P116～P117。
上掲『臨床の知とは何か』、P134～P135。
- 10) 上掲『臨床の知とは何か』、P129～P130。
- 11) 上掲『臨床とことば』P129～P131。
- 12) 多様な要因をゲシュタルト的に統合しうる概念、ツールとして、有望だと筆者が考える概念がある。セン(A. Sen)の「潜在能力(capabilities)アプローチ」におけるウェルビーイング (well-being) 概念である。1999年以降、この概念のパラフレーズを試みてきた。「福祉 (well-being) 概念における『自己決定の尊重』理念の検討」、中村俊也著、熊本学園大学「社会関係研究」、第7巻第1号、2000、P55～P79。
- 13) 上掲『臨床の知とは何か』、P130。
- 14) 上掲『臨床とことば』、P129～P131。
- 15) 上掲『術語集』、P188。
- 16) 再び、河合隼雄に登場してもらおう。「鷺田 臨床心理士の人や精神科医の人はもちろん、別に何も専門的な知識を持たない僕のような者でも『あっ、いいほうに向かっている』とか『変調が起こりつつある』と

かいうことはわかりますね。普通の者が、ほかの家族あるいは友達とか同僚とかを見ていて、変調というのがわかる。顔をパッと見ただけでも『おかしい!』とわかりますね。ああいうものというのは、何を思っているんですかね。あるいは、そういう知識や勘はどこから・・・？

河合 そういうものは、もっと研究に値しますね。人間は皆、そういうものをものすごくもっているわけですよ。そのなかで、言語に比較的しやすくて論理体系に乗る方の知識が、どうしても価値を持ちますね。今までは、それだけが知識みたいになり過ぎたんじゃないんでしょうか。それが非常にひどくなっている人とか、ものすごく偉い学者だけども何も気がつかない人とか、いるでしょう？それはそっちのほうに傾いてしまっているわけです。『臨床とことば』、P149～P150。下線は筆者による。）下線部は、当然、「臨床の知」についての発言であり、後述するM.ポランニー（M.Polanyi）が提唱している「暗黙知」についての発言でもある。

17) 上掲『術語集』、P187～P188。

18) jacsw.or.jp.

19) 上掲『術語集』、P189。

20) 上掲「福祉（well-being）概念における『自己決定の尊重』理念の検討」参照のこと。

21) 「ウェルビーイング実現へのアクセスとしてのソーシャルワーク実践—ソーシャルワーカーに人権と社会正義はいかなる指針を示すのか—」、中村俊也著、熊本学園大学「社会関係研究」、第10巻第1号、2004、P105～P129、参照のこと。同論には、医師や弁護士、介護福祉士の倫理綱領（2004年当時）とIFSWの「ソーシャルワークの定義」（2000年の旧規定）を比較した結果を考察している箇所あり。ソーシャルワーク実践を正当化するの「人権」と「社会正義」という2つの根拠は、弁護士も同様に根拠として挙げられている。すなわち、「人権」と「社会正義」

という概念は、ソーシャルワークの「固有性」を構成するものではあるが、「独自性」を主張する根拠としては十分ではない。

22) 上掲『術語集』、P189。

23) 「処遇」という用語は、処理するというニュアンスを多分に含んでいるため、現在では、ほとんど使用されていない。同様に、英語の treatment も、同様のニュアンスであるため、かつては使用されていたが、現在ほとんど使用されていない。まさしく「科学の知」に特有な「事物を対象化し操作する知」のあり方から生じた、かつてのソーシャルワーク論の観点の現れであるといえよう。なお現在は「介入」という用語が使用されているが、英語の intervention が原語であり、調停や仲裁といったニュアンスが含まれており、「介入」は、その一般的な語感から、必ずしもいい訳語ではないと、筆者はかねてより感じている。

24) 前掲「ソーシャルケースワーク論における福祉利用者の能力概念の検討—人・環境の interaction から transaction へ—」参照のこと。

25) 上掲『術語集』、P189。

26) 上掲『臨床の知とは何か』、P95～P99。

27) 上掲『臨床の知とは何か』、P133。

28) 上掲『臨床の知とは何か』、P133。

29) 上掲『臨床の知とは何か』、P134～P135。

30) 上掲『臨床の知とは何か』、P134～P135。

参考文献

- ・“De La Méthode Socialologique”, Émile. Durkheim, 1895. 邦訳『社会学的方法の基準』、宮島喬訳、岩波文庫、1978。
- ・“Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft”, Heinrich Rickert, 1898. 邦訳『文化科学と自然科学』、佐竹哲雄、豊川昇訳、岩波文庫、1939。
- ・“Die»Objektivität« Sozialwissenschaftlicher und Sozialpolitischer

Erkenntnis”, Max. Weber, 1904. 邦訳『社会科学方法論』、恒藤恭校閲、富永祐治、立野保男共訳、岩波文庫、1936。『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』、富永祐治、立野保男訳、折原浩補訳、岩波文庫、1998。

- ・ “The Casework Relationship”, F. P. Biestek, Loyola University Press, 1957. 邦訳、『ケースワークの原則[新訳版]』、尾崎新、福田俊子、原田和幸訳、誠信書房、1996。
- ・ “Personal knowledge”, Michael Polanyi, The University of Chicago Press, 1958. 邦訳、『個人的知識—脱批判哲学をめざして—』、長尾史郎訳、ハーベスト社、1985。
- ・ “The Tacit Dimension”, Michael Polanyi, The University of Chicago Press, 1966. 邦訳、『暗黙知の次元』、高橋勇夫訳、ちくま学芸文庫、2003。
- ・ “Conjectures and Refutations”, K. R. Popper, Routledge & Kegan Paul Ltd, 1963. 邦訳、叢書ユニベルシタス95『推測と反駁—科学的知識の発展—』、藤本隆志、石垣壽郎、森博訳、法政大学出版局、1980。
- ・ “Philosophical Foundations of Physics”, Rudolf. Carnap, New York Basic Books, 1966. 邦訳、『物理学の哲学的基礎』、沢田允茂、中山浩二郎、持丸悦朗訳、岩波書店、1968。
- ・ 『臨床社会福祉学の基礎研究〈第2版〉』、足立勲著、学文社、2003。
- ・ 『新しいソーシャルワークの展開』、岡本民夫・平塚良子編著、ミネルヴァ書房、2010。
- ・ 『ソーシャルワーク理論の歴史と展開—先駆者にたどるその発展史—』、小松源助著、川島書店、1993。
- ・ 『疑似科学入門』、池内了著、岩波新書、2008。
- ・ 『臨床とことば』、河合隼雄、鷺田清一著、阪急コミュニケーションズ、2003。
- ・ 『ソーシャルワーク理論の歴史と展開—先駆者にたどるその発展史—』、

小松源助著、川島書店、1993。

- ・『対人援助の臨床福祉学』、佐藤俊一著、中央法規、2010。
- ・『看護師の臨床の知』、佐藤紀子著、医学書院、2007。
- ・『知性の限界—不可測性・不確実性・不可知性—』、高橋昌一郎著、講談社現代新書、2010。
- ・『感性の覚醒』、中村雄二郎著、岩波書店、1975、「同時代ライブラリー」版、1997。
- ・『共通感覚論』、中村雄二郎著、岩波書店、1979、「岩波現代文庫」版、2000。
- ・『魔女ランダ考—演劇的知とはなにか—』中村雄二郎著、岩波書店、1983。「同時代ライブラリー」版、岩波書店、1990。「岩波現代文庫」版、2001。
- ・『術語集』、中村雄二郎著、岩波新書、1984。
- ・『臨床の知とは何か』、中村雄二郎著、岩波新書、1992。
- ・『術語集Ⅱ』、中村雄二郎著、岩波新書、1997。
- ・『「わかる」とは何か』、長尾真著、岩波新書、2001。
- ・『社会福祉士実習指導者テキスト第2版』日本社会福祉士会編、中央法規、2014。
- ・『哲学の謎』、野矢茂樹著、講談社現代新書、1996。
- ・『社会福祉学の方法—アイデンティティの探求』、古川孝順著、有斐閣、2004。
- ・『哲学事典』、平凡社、1979。
- ・『新しい科学論』、村上陽一郎著、講談社ブルーバックス、1979。
- ・『近代科学を超えて』、村上陽一郎著、講談社学術文庫、1986
- ・『奇跡を考える』、村上陽一郎著、講談社学術文庫、2014。
- ・『科学の哲学』、柳瀬睦男著、岩波新書、1984。
- ・『〈複雑系〉とは何か』、吉永良正著、講談社現代新書、1996。
- ・『ソーシャルワークの定義、倫理、教育・養成に関する世界基準』、

IASSW・IFSW、相川書房、2009。

- ・「現代思想のキーワード」、現代思想vol. 28-3、青土社、2000。
- ・「日本社会福祉士会NEWS」、No.176、2015。
- ・「福祉（well-being）概念における『自己決定の尊重』理念の検討」、中村俊也著、熊本学園大学「社会関係研究」、第7巻第1号、2000。
- ・「ソーシャルケースワーク論における福祉利用者の能力概念の検討—人・環境のinteractionからtransactionへ—」、中村俊也著、熊本学園大学「社会関係研究」、第8巻第1号、2001。
- ・「ウェルビーイング実現へのアクセスとしてのソーシャルワーク実践—ソーシャルワーカーに人権と社会正義はいかなる指針を示すのか—」、中村俊也著、熊本学園大学「社会関係研究」、第10巻第1号、2004。
- ・「ソーシャルワークの基盤としてのケアマネジメント手法と基底的視座としてのウェルビーイング概念」、中村俊也著、熊本学園大学「社会関係研究」、第14巻第1号、2009。

**An examination of the structure of social work expertise
-the outlines of Yujiro Nakamura's concept of 'clinical knowledge' -**

NAKAMURA Shunya

Abstract

This paper will discuss the structure of social work expertise through the outlines of Yujiro Nakamura's concept of 'clinical knowledge', while simultaneously considering the meaning and significance of 'Global definition of social work profession' of IFSW and IASSW. Analyzing the structure of social work expertise can assist in presenting the often difficult to communicate aspects of individual experience through practice, in order to codify as a system of knowledge and be able to communicate this system to others.